

第三九回村研大会印象記

田 中 和 美

村研大会への参加は、今回が初めてである。村落についての勉強をはじめ間もない私が大会に参加して、先生方の報告をいっただけだけ理解できるのだろうかと不安に思いながらも、参加させていただくことにした。

木曾を訪れるのも、今回が初めてである。旧中山道奈良井宿の古い家並み、関所跡、木曾漆器など、興味は尽きない。木曾で吸収したことがらは、盛りだくさんであった。

結果的には、すべてを吸収することはとうてい不可能で、消化不良を起こしてしまったのだが、それでも私なりに、村研大会に参加した感想を述べさせていたかどうかと思う。自由報告、課題報告のいずれも興味深い内容であったが、紙面の都合上、そのすべてについ

て言及することは不可能なので、ここでは共通課題「日本農業・農村研究の課題を求めて―家族経営危機の国際比較・環境問題・農業危機・集落機能の接点としての家族経営危機―」とそれを受けた共同討議について、感じたことを述べていただく。

この共通課題は、家族経営の崩壊過程を客観的に分析するだけでなく、家族経営の存在意義を理念的、運動論的に検討するとともに、国際比較を通して現在の日本の農業・農村が直面している問題を把握し、日本農業の再建のための参考材料としようという趣旨のもとに設定されたものである。「コメの輸入自由化」問題を機に、日本農業の存在意義を根本から問い直す議論が盛んであるが、そのなかで、客観的な「農村の研究」に留まらない「農村（農業）のための研究」が試みられたといえよう。

さて、共通課題の趣旨にもとづき、五人の方々による課題報告がなされた。

磯辺会員の「家族制農業の存在構造―現代の危機を考える―」は、「いえ」「むら」の原理を再構成し、それを類型化した上で、新しい「持続的地域社会」への移行の論理の構成を試みるものであった。「持続的地域社会」とは、集団的土地利用秩序にもとづく「近代」を越えたものとして構成される社会である。

高山会員の「西ドイツにおける環境保護的農業政策の展開」は、西ドイツにおける環境保護的農業政策の展開を検討することによって、「社会的費用」の側面から、自然諸力の社会的評価問題を考える手がかりを得ようとするものであった。いいかえれば、土地・水などの自然的公共財を保護するために支払われる様々な負担を、市場経済のもとでどのように位置づけていくのかという問題について

の検討であった。報告を聞いて印象に残ったことのひとつは、西ドイツでは農業に対する世論の評価が、日本とはずいぶん異なっていることである。西ドイツにおいては、農業は「保護されるべきものである一方、「環境の汚染者」であるとの認識が強まりつつある。農業を市場原理になじまないものとしてとらえるこのような世論の動向は、土地・水などの自然的公共財に対する国家の政策と深く拘わるものと思われる。

河村会員の「アメリカ合衆国における農業企業化と地域社会の福祉」では、合衆国における農場規模と地域社会の生活水準との関係の検討から、この関係には地域差があること、地域社会との社会的経済的結びつきが弱まる方向で農場が発展する場合には、その地域社会への影響はネガティブなものとなることを示され、農業を評価する場合には、農業発展のネガティブな社会的経済的効果も考慮する必要があることを指摘された。そして報告後の質疑のなかでは、これまで日本農業のマイナス面と考えられてきた農業とコミュニティとの強い結びつきは、非市場経済的なものとして農業を見直そうとする場合には、これまでとは違った評価を加えることができるのではないかとの意見が出された。「農業の近代化」というと、即座にアメリカの大農場を理想として描いてしまいがちであるが、この報告は、アメリカのフォーティズムの農法を単純に理想的なものと考えてしまうことに社会経済的側面から反省を迫るものであったと思う。

李会員の「韓国農業における家族経営の危機」は、韓国における家族経営の危機の現状および要因を多角的に分析すると同時に、家族経営の存在意義と存続条件を究明しようとしたものであった。お

隣の国でありながら、韓国の農業の実態についてはこれまでほとんど知らなかったので、大変興味深く報告を聞かせていただいた。なかでも韓国における農家戸数、農家人口、農家世帯員数の急速な減少は衝撃的であった。韓国では一九六〇年代の日本を上回る速度で農業構造が変化し、家族経営の危機が進行していることがわかった。また、営農会社および農事法人といった新たな経営形態の出現は、今後、市場経済原理にもとづく企業的経営と家族経営がどのような形で共存していくのかという問題につながるものであろう。

佐藤会員の「北タイにおける農業経営の変容」は、北タイの二つの村における調査をもとに、従来の土地に依拠した家族農業形態（「屋敷地共住集団」）にもとづく親子の共同農業経営）が生産関係の賃労働化と生活面での商品経済の浸透によって変化していることを示されたものであった。

以上の課題報告をもとに、二日目午後からの共同討議が行われた。フロアからの質問に五人の報告者が答える形で、討議が行われた。家族経営危機の問題を分析するとき、その地域の社会構造や社会文化状況の問題とのかねあい考えていかなければならないのではないかと、との質問に対し、磯辺会員は、危機の程度や質は国によって異なるが、各国の問題は相互に関連し合っているため、相互の関連の構造を考えていく必要があると答えられた。今回の共通課題についての報告は、いずれも家族経営危機の問題を考えるうえで大変重要なものばかりであったが、それぞれの報告で扱われた各国の問題が相互にどう関連しているかということについては、不明確であったように感じられた。その点で、磯辺会員の指摘は、大変重要であったと思う。また、磯辺会員の報告のなかで提示された、新しい

「持続的地域社会」への移行の図式は、今後の議論の収斂の契機になるのではないかと思う。また、米沢会員からは、集团的土地利用についての日韓比較が提起されたが、ここにも興味深い論点が含まれているのではないかと感じた。

討議の終わりに、司会を勤められた松田会員が、共通課題についての議論を整理し、問題を図式化された。この図によって、国際比較すべき問題の内容がより明確にされたので、今後は、共通の問題枠組にもとづいた、横のつながりのわかる、より精緻な国際比較が可能になるのではないかと思う。

今回の大会報告は、自由報告が八つ、課題報告が五つと例年より多く、発表時間も短くなっているとお話してあった。それでも、初参加の私から見ると、自由報告の時間が一人につき三五分（報告二五分・質疑一〇分）というのは、比較的ゆとりがあるように感じられた。さらに、報告者から「この続きは懇親会の席で」との発言が出たように、懇親会などの形で報告について論じ合う時間が充分確保されているのは、大変魅力的であった。共通課題についても、二日目の午後が共同討議に当てられており、報告について全体で考えていく場が大切にされていると思う。ただ、時間の都合で共同討議を前にして退席される方々が多くいらしたことを残念に思った。

自由報告、課題報告ともに、大変勉強になり、啓発される場所の多い二日間であった。質的にも量的にも、消化不良をおこすほどたっぷり勉強させていただいて、報告者の方々をはじめ、会員の先生方には、深く感謝いたしております。

最後になりましたが、大会運営にご尽力いただいた黒崎先生をはじめとする信州大学の皆様、松本先生、庄司先生をはじめとする

（前）事務局の皆様、桜川村の皆様にご心よりお礼申し上げます。